

「生ける望みへの新生」

ペテロ第一 1:1-12

まず背景を少し説明しましょう。この手紙は、各地に離散したクリスチャンに向けてペテロが書いたものです。そこには、5つの町の名が挙げられています。この手紙は、紀元64年ごろに書かれました。ペテロの手紙の中で、苦しみや苦難ということばが15回も登場します。その後、紀元67年には、ペテロ自身も十字架にかけられました。伝承によると、ペテロはイエスのように十字架にかけられました。しかし、イエスと同じ死に方をする資格が自分にはないと考えたペテロは、十字架をさかさまに立ててほしいと頼んだそうです。こうしてペテロは、神を賛美しながら死んでいきました。

ペテロは、ネロによる迫害を受け始めたクリスチャンにこの手紙を書き送りました。皆さん、ネロをご存じでしょうか。ローマ帝国の皇帝で、ひどい人でした。獣と呼ばれたほどです。彼の権力は絶大で、クリスチャンをはじめ、多くの人を処刑しました。人を猛獣のえじきにして楽しんだり、タールに浸した人を棒にくくりつけて庭に立て、夕方になるとたいまつとして燃やしたりしました。それだけでは飽き足りず、人をくいに縛りつけ、自らが猛獣の毛皮を着て、爪に見立てた鋭い刃物を手に付けて、縛られた人を切り裂くこともしました。

この手紙は、離散した旅人に向けられています。つまり、散り散りになってしまった非ユダヤ人のクリスチャンです。しかし、その内容は現代の私たちにもあてはまります。この世でクリスチャンとして生きる私たちも、ある意味で旅人です。私たちの国籍はこの世ではなく、天にあります。

「この世は橋だ。賢者はこれを渡るが、その上に家は建てない。」という言葉があります。私たちの永遠の故郷は天国です。一世紀のクリスチャンと同じように、21世紀に生きる私たちも苦しみを経験するでしょう。この手紙は、私たちに勇気を与えてくれます。また、神との関係についていくつか大切なことを教えてくれます。

正しく理解するために、2節で三位一体の神が示されていることに注目しましょう。「父なる神の予知に従い、御霊の聖めによって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人々へ。どうか、恵みと平安が、あなたがたの上ますます豊かにされますように。」父が予知に従って誰が救われるかを選ばれ、御霊がその人たちを聖めます。聖めるとは、罪や悪から取り分けられるという意味です。そして、御子であるイエス・キリストがいけにえと血の注ぎかけとしてご自身のいのちをささげられました。どのようにしてこれらのことが起こるのかについてはもっと詳しくお話することができますが、それはまたの機会にしておきましょう。今日のところは、三位一体の神が働いておられるということ覚えておいてください。父が選び、御霊が聖め、子がいけにえとなられました。すべては、私たちが神の家族に迎え入れられ、天でとこしえまで過ごす永遠のいのちを受けるためです。

3節は、神が私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださったと語ります。

「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。」神が与えてくださった新しいいのちです。

私たちは、生ける望みを持つようにと生まれ変わりました。この望みとは何でしょうか。「早く涼しくなってほしい」のように、そうなってほしいと望むことでしょうか。「この苦労もあと少しで終わってくれるとよいけど」といったように、悩みや苦労があって、解決の兆しが見えてきたときに気分が晴れることでしょうか。

このみことばの望みは、それ以上のものです。ここで語られる望みは、イエスの復活という事実に基づくものです。そうだったらいいのにな、ではありません。これは事実です。聖書がそう語りま

す。イエスは死んで、死からよみがえりました。数々の証拠がそれを物語ります。キリストの十字架の死と埋葬、そして復活を法廷の裁判のように検証したなら、それが事実であるとう判決が出るでしょう。イエスを見たという目撃証言があります。それも数人ではなく数百人の証言です。「その後、キリストは**五百人以上の兄弟たちに同時に現れました**。その中の大多数の者は今なお生き残っていますが、すでに眠った者もいくらかいます。」

そうであってほしいという理由から、真実でない証言をする人もいます。しかし、偽証する人にプレッシャーを与えたり、殺すと脅したりすると、すぐに証言を覆します。一方、イエスの復活の目撃者は、証言の内容を変えたりしませんでした。彼らは拷問を受け、ついには殺されましたが、証言は変わりませんでした。イエスは生きておられます。彼らは十字架にかけられました。この手紙を書いたペテロも逆さ十字架にかけられました。生きたまま火あぶりにされた者もいます。煮えたぎる油に放り込まれたり、皮を剥がれたりしました。多くの観衆の見る前で競技場に入れられ、殺されました。それでも、彼らは最後まで、イエスが死からよみがえったと証言しつづけました。さらに、旧約聖書の預言の数々は、イエスがお生まれになる何百年も前に書かれたものですが、イエスの復活が真実であることを証言します。

皆さん、これは真実です。信頼して望みをかけることができる事実です。神はイエスを死からよみがえらされました。そして、私たちのことも死からよみがえらせてくださいます。神を信じる者を、神は永遠のいのちへとよみがえらせてくださいます。信じない者は、裁かれます。

4節は、イエスの死と復活のおかげで、私たちは永遠に朽ちない資産を天で受け継ぐと語ります。「また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。」

私の地上の故郷は消えつつあります。私は、インディアナ州のウィノナレイクで育ちました。私にとって、そこが故郷です。けれども、両親が亡くなって以来、私の育った家は3度も売りに出されました。リフォームが施され、すっかり外観も変わりました。何より、両親がもうそこにはいません。そこはもはや、かつて故郷だった場所に過ぎないのです。けれども、天国は永遠です。

神の子である私たちには資産があります。その資産は消えることはありません。私たちの地上の命は消えつつあります。生きるということは、日々、この命に別れを告げる日に近づいているということです。1章の後半、24-25節は、次のように語ります。「人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことばは、とこしえに変わることがない。」これは、旧約聖書のイザヤ書40：6-8の引用です。

私たちは草のようです。この地上で束の間の命を生きます。美しい花のように開花するかもしれませんが、いずれは衰えて死にます。しかし、神のことばは永遠に変わりません。その神のことばが語ります。神を信じる者には、永遠の命があると。

5節は、神ご自身によって私たちは守られていると語ります。「あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現されるように用意されている救いをいただくのです。」

私たちの資産が神によって天に備えられているだけでなく、私たち自身を神は守ってくださいます。私たちが神のうちにあるなら、守ってくださいます。私は赤ん坊の時から両親に連れられて教会に通っていました。それは本当によかったと思っています。不必要な悩みや苦しみから守られました。そんな私も、銀行強盗や殺人犯と同様にキリストの赦しを必要とする人間です。

教会に幼いころから通っていてよく耳にしたのは、イエスを救い主として受け入れることと、良い子でいることでした。イエスを受け入れて良い子になる、このふたつはセットのようでした。それで私は悩みました。「お父さんの言うことを聞かなかった。誰かに意地悪なことを言ってしまった。人の物を勝手に取ってしまった。じゃあ僕は良い子ではないのかな。ということは、僕は救われて

いないのかな。」こんなふうに関心の呵責に長年苦しみました。けれどもあるとき、この個所や、これに似たみことばに目が開かれました。私は神に守られているのです。私が良い人かどうかは関係ありません。神が私を神の子としてくださり、神の家族の一員として守ってくださるのです。もう悩む必要はありませんでした。もちろん神を敬い、神に従おうとしますが、もし失敗しても救いを失うことはありません。ただ神の御前に出て告白すれば良いのです。罪を犯してしまったら、すぐにでも告白したいと私は思っています。同時に、自分の犯した過ちをできるだけ償うことも告白することの一部です。盗ったものを返すとか、ひどいことをしてしまった相手には謝罪して赦しを請うなどの行動を起こすのです。

けれども、失われて再び救われるということではありません。神との良好な関係を取り戻すということです。神は私を神の子として受け入れてくださいました。そのことは変わりません。私の息子が何か悪いことをしても、息子を勘当したりしません。役所に行って籍を抜いたりしません。息子は息子です。しつけのために、何かを禁止するなど何らかの罰を与える必要があるかもしれませんが、しかし、愛情をもってすることです。息子だから、息子のことを思っているのです。息子を守るためにできるだけのことをしようと私はします。

私たちは信仰をとおして神の力によって守られています。ですから、信仰が必要です。では、信仰はどこから来るのでしょうか。究極的には、信仰も神から来ます。私たちに信仰を与えてくださるのは神です。しかし、神の子として私たちにも信仰を育むためにできることがあります。例えば、聖書を読んでみことばに思いを巡らす、毎日祈って神に話しかける、教会に来てともに学び礼拝する、他のクリスチャンと一緒に過ごすなどです。

6節は、私たちが苦しみや悲しみの中で喜ぶと語ります。「そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいて、いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならぬのですが、」

試練と訳された個所が誘惑と訳される場合もありますが、試練のほうが原語のギリシャ語の意味により近いと思われます。8節は、私たちがことばでは表せない栄光に満ちた喜びをもって喜ぶと語ります。「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。」

聖書がいう「喜び」とは何でしょう。笑顔があふれるうれしいあたたかい気持ちでしょうか。喜びは、悲しみの反対語と言えるでしょう。すべては安泰で、良いことの訪れる兆しがあり、最後にはすべてが正されるという平安と充実感が喜びです。うれしいとか、成功とか、おもしろいとは違います。すべてが良きとなる深い確信と期待です。どんなことが起こっても、最後には良くなるという感覚です。よく使われる例えですが、生まれてくる赤ん坊を腕に抱く日を楽しみに待つ妊婦のようなものです。けれども、その前に生みの苦しみを体験しなければなりません。痛みと疲労は相当なものです。赤ん坊を腕に抱く喜びのために踏ん張ります。その痛みを乗り越えれば喜びがやってくると知っているからです。クリスチャンにとって、この世の人生は生みの苦しみのようなものです。違いは、その痛みや苦しみが出産のように一度にやって来るものではなく、一生にわたって少しずつやってくるという点です。ローマ人への手紙には、私たちが神の子どもたちの現れを待ち望んでともにうめきともに産みの苦しみをすると語ります。私たちは天国を待ち望み、霊の中でうめいているのです。

神が私たちのうちになさっていることがずいぶん後になるまでわからないことがよくあります。神は、人生のあらゆる出来事を用いられます。その人がクリスチャンになる前から、神を信じるように導くために、あらゆる物事を用いられます。本人が自分はクリスチャンになると知る前から、神は予知によってその人を選び、試練を益のために用いられます。

神は私たちの人生のあらゆる出来事を、ご自身の栄光のため、また私たち自身のために用いられます。ですから、私たちは後の喜びに期待することができます。つまり、今の苦しみが後になって喜びを生み出すということです。両親が病気の人もいるでしょう。大切な人を亡くした人もいるでし

よう。家庭や職場で大きな悩みを抱えている人もいます。信仰上や霊的なことで疑問を持っている人もいます。もしかしたら。

そのひとつひとつの事柄は、意味もなく起こっているわけではありません。私たちの中に神がなさっていることの一部だということをしっかりご承知ください。神は悪いことをもたらすことはなさいませんが、すべてのことを用いてご自身のみこころを成就されます。ただ、私たちにはそれがよく見えないだけです。ジョン・バニヤン著の「天路歷程」に、解説者の家を訪れる場面が登場します。解説者は、神がどのように働かれるか主人公が理解できるように手助けします。解説者はクリスチャンという旅人を庭に連れ出します。そこには壁の下から炎が燃えていました。その炎は人の心になされる神の働きです。悪魔はそこで炎に向かって水をかけています。その水とは、悲しみ、誘惑、迫害、苦勞などです。しかし炎は消えません。悪魔がどれほど水をかけても、炎は燃え続けます。どういふことでしょうか。解説者はクリスチャンを壁の向こう側に連れていきます。そこでは、キリストの霊が壁の下に通じる穴に恵みの油を注いでいました。火に油が注がれているおかげで、どれほど水がかけられても炎を消すことはできないのです。クリスチャンである皆さん、今ここにいます。私達も同じです。今はつらいかもしれませんが、悪魔や私達を取り巻く状況が、神の働きという炎に水をかけているかもしれません。けれども、神の御霊は壁の向こう側の見えないところで、ご自身のお働きに休みなく油を注いでくださっています。

10-11節には、いつキリストが苦しみ、そののちに続く栄光をお受けになるかについて預言者たちが尋ねたとあります。「1:10 この救いについては、あなたがたに対する恵みについて預言した預言者たちも、熱心に尋ね、細かく調べました。1:11 彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、**キリストの苦難とそれに続く栄光**を前もってあかしされたとき、だれを、また、どのような時をさして言われたのかを調べたのです。」

苦しみが栄光に続いているのです。これは公式とも言えるでしょう。ただの苦しみではなく、義を求める苦しみです。ヘブル 12:2 は、イエスが十字架とその苦しみを耐えられたのはご自分の前に置かれた喜びのためである、このお方に目を向けなさいと教えます。これこそ喜びです。クリスチャンの皆さん、今苦しんでいますか。今苦しんでいなくても、いつか必ず苦しみに遭う時がきます。そのときは、イエスを見上げましょう。イエスが苦しみに耐えられた姿に目を向けましょう。

人はクリスチャンになると、新しく生まれ変わります。新しい性質をいただきます。罪の性質ではなく、恵みのもとに生きるのです。神の目には、私たちは純真無垢に映ります。イエス・キリストの義をまもっているからです。イエスが身代わりになってくださったのです。私たちが犯した過ちや悪事を、イエスがご自身の過ちとして引き受けてくださいます。その罰は死です。神はこの世を美しい完全な場所としてお造りになりました。しかし、私たち人類が、この世を罪と苦しみと死で満たしてしまいました。神は人を愛しておられます。けれども、悪に耐えることはできません。神のご臨在の中に悪は存在できないのです。ですから、悪を行った罰は死です。イエスは、私たちの犯した悪の責任を負って、私たちの代わりに死なれました。

私は先週、実話に基づいた戦争映画を見ました。収容所の捕虜の物語です。捕虜たちは、点検のために外に立たされていました。そのとき、シャベルがひとつなくなっていると道具担当の監視員が報告しました。シャベルを盗んだ者は自ら名乗り出ると収容所の所長が言いましたが、誰も名乗り出ません。盗った本人が名乗り出ないのであれば、捕虜全員に罰を与えると所長が言うと、ひとりの男性が進み出ました。所長はその男がシャベルを盗んだことに憤慨し、シャベルで男を殴りました。男性は床に倒れましたが、所長は怒鳴りながら男性を殴りつづけました。そのときです。道具担当の監視員が出てきて、間違いでしたと言いました。シャベルは揃っていました。数え間違ったのです。殴られた捕虜は一命をとりとめましたが、脊椎損傷で下半身不随になってしまいました。無実の人が、他の人のために苦しみを受けたのです。彼は自らその罪をかぶりました。捕虜の仲間を愛していたからです。

これは、イエスがしてくださったことと似ています。ただし、私たちは神の律法を実際に破ってしまいました。悪いことをし、憎しみ、傲慢、嫉妬、憤り、恨み、噂、妬みなどの罪を犯してしまい

ました。イエスは、ご自身のもとに来て赦しを請うすべての人々のために、その罰を負ってくださいました。

そして、イエスをご自身の善意と義を与えてくださいます。イエスは一度も罪を犯さなかったと聖書は語ります。イエスは、父なる神に一度も背きませんでした。イエスが代わりになってくださったらどうなるのでしょうか。代わりに、神の子という立場が与えられました。私たちはこうして神の子となります。もっと知りたい方は、ローマ人への手紙 8 章をお読みください。キリストのうちにあるなら、私たちは神の子です。

これは素晴らしいことだったので、預言者たちは待ち望みました。しかし、これは彼ら自身のためでなく、将来のため、私たちのためであると知らされました。12 節は、これについてふたつのことを述べています。「彼らは、それらのことが、自分たちのためではなく、あなたがたのための奉仕であるとの啓示を受けました。そして今や、それらのことは、天から送られた聖霊によってあなたがたに福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。それは**御使いたちもはっきり見たいと願っていること**なのです。」

神は、栄光に満ちた知恵によって、このすべてのことを私たちのために備えてくださいました。昔の預言者たちも私たちのために奉仕してくれました。そう考えると、とても謙虚な気持ちになります。旧約聖書を読むと、神に仕える人々には神の祝福の御手があったことがわかります。とくに、ユダヤ民族の上に神の祝福がありました。彼らは神の選びの民でした。しかし、神のご計画はそれ以上のものでした。神の御子イエスを全世界の救い主とするために、ユダヤ人の女性から生まれさせられました。こうして今は、神に選ばれた民は中東に住むユダヤ人だけではなく、世界中にいます。中国、スーダン、マレーシア、カナダ、エジプト、ハンガリー、大阪、どこにでもいるのです。

12 節は、御使いたちがこれらのことをはっきり見たいと願ったと語ります。神の子であることを当然のことと思わないでください。これは特別なことです。皆さんは天使になりたいですか。もちろん、天使にはなれません。神は私たちを人間として作ってくださったので、天使になることはありません。しかし、少し想像してみてください。天使になれたらすごいと思いませんか。壁をすり抜けたり、誰にも気づかれずに部屋に入ったりできます。物を動かしたり、危険な目に遭っている人を助けたりもできます。スーパーマンみたいです。聖書によると、御使いは神に遣わされて仕えます。神に従わなければなりません。そのようなすごい力をもってしても、御使いたちが理解できないことがあります。彼らは、救いについてはっきり見たい、知りたいと願います。私たちが罪の中で失われていて、死んで地獄で苦しむ運命にあったのに、神があわれみをもって私たちを救ってくださった話です。御使いにはいろいろなものが見え、力を持っていますが、私たちと同じ経験をすることはできません。つまり、かつて失われていたけれど、イエスに救われたという経験です。御使いたちがこれをはっきり見たいと願ったというのは何ともすばらしいことです。

もしあなたがクリスチャンなら、次のことを覚えていてください。

- 神によってあなたは新しく生まれ変わった。
- 神はあなたのために資産を備えてくださる。あなたのために天国に場所を備えておられる。
- 神はあなたを守っておられる。
- この世で苦しんでも、神はご自身の栄光とあなたの益のためにその経験を用いてくださる。
- 最終的には大きな喜びがある。今からそれに期待して喜ぶことができる。
- 神があなたのためにしてくださったことを覚えて感謝しよう。

あなたがまだクリスチャンでないなら、これらのことについて考えてみてください。皆さんにお伝えします。これは神の真理です。真理とその力を理解できるように助けてくださいと神に祈りましょう。

では、祈りましょう。まず私が祈って、皆さんが祈る時間を取ります。静かに祈っても、声に出して祈っても、どちらでもけっこうです。悩みや疑問、喜びをすべて神のもとに持っていきましょう。